

# 新論理学派の「行為主体性 (kartṛtva)」定義

ーバヴァーナンダ・シッダントヴァーギーシャ

『カーラカ・チャクラ (Kāṛakacakra)』第2節ー

工 藤 順 之

## 思想的背景ー序に代えて

十四世紀以降のインド思想界は新たな論理体系と論述形式に席卷された。その新しい思潮を主導していたのはいわゆる新論理学派 (Navya-Nyāya) である。新論理学派はその萌芽をウダヤナ (Udayana, ca. 930-990 CE) に持ち、ガンゲーシャ (Gaṅgeśa Upādhyāya, ca. 1300-1360 CE) によって思想体系として確立したと言われる。彼らの主たる論題は認識問題であり、特にガンゲーシャがその著作『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi) において四つの認識手段 (pramāṇa) をそれぞれ一つの章に配当して論じ、その形式がその後の新論理学派の標準的な著作或いは註釈論述形式となったことから明白なように、認識対象より認識手段の考察を中心課題としていた。彼らは古典論理学派 (Pracīna-Nyāya) に対して論理的な概念規定を厳密に確定する点において殆ど同一の系譜に属するとは思われない程の緻密な体系を作り上げた。新しい概念を導入しながら論理概念の定義付けが行われ、定義はさらに定義化を要求し、その複雑で微細な定義に基づいて様々な概念が明らかにされていく。そこで導入された概念は主として関係性の概念である。

彼らが構築した複雑な論理体系は認識手段の一つである「言語」(śabda)<sup>(1)</sup>に関する議論も包括する。感覚器官と対象から直接知覚が成立し、遍充概念と想起から推論が成立するという認識手段のあくまで一般的な枠組みに倣って言えば、発話された語とその意味から認識が成立するというのが認識手段として

の言語である。この極めて単純化した構図から、一般に文と称される言語要素の集合から如何に認識が生ずるのかという問題に彼らは関心を向けていく。彼らのとった手法は文として話し手によって発されたものを聞き手がどのように理解し、知識を獲得するかという認知過程の分析である。文として発されたものはそれを構成する幾つかの単語に解体され、さらに各単語はそれ自体では実用されない文法的項目に分割される。個々の要素はそれぞれの意味を表わし、それら個々の意味が再び中心的意味要素に統合されて、聞かれた文としての意味の総体が理解される。彼らはそれを「言語に基づく認識」(sābdabodha)と呼ぶ。個々の意味とその語との関係、語と語の関係がそれぞれいかなる関係性の下にあるのかという議論の中で、彼らは言語分析においてすら論理学体系に合致する文法を要求したのである。単に正しい文の派生・分析というレベルだけではなく、論理体系に組み込まれた文法解釈技法を作り上げたと言ってもよからう。

こうした彼らの思想に敏感に、しかも危機感をもって対応せざるを得なかったのは言うまでもなく文法学派であった。両学派ともパーニニ (Pāṇini, ca. 5th c.BCE) によって編まれた『アシュターディヤーイー』(Aṣṭādhyāyī) の規定を正規サンスクリット語の典拠としながらも、そこから導き出される解釈は独自の体系が理論的に要求するところに応じて相容れないものとなる。対論者である新論理学派の論述形式を逆用する形で文法学派も自説を展開していくが、これは方法論において文法学派も新論理学派の強い影響に巻き込まれていたこと、思想論述形式として新論理学派の構築したスタイルを抜きにしては論争が不可能になっていたことの証左である。

さて本稿の主題とする「行為主体」概念を「行為の実行者」として今単純に指定しておく、認識の上に立ち現れるこの行為の実行者が言語表現にあつてどの文法的要素によって表示されるのか、そして行為と呼ばれる内容といかなる関係にあるのか等の問題について各学派は様々な解釈を提示する。それは最終的には言語認識の構造をいかに立てるかという問題に直結する。新論理学派によって提唱された言語認識分析では「文」(vākya) は各単語間、更に単語

を構成する要素間に限定・被限定関係 (viśeṣyaviśeṣaṇabhāva) が成立したものと説明され、これは文法学派の立場でもある。各学派の相違はこの限定関係がどの要素間に成立しているかの相違に他ならない。今は立ち入った議論を控えるが、本稿主題の理解の一助とすべく両学派の論争の前提となるそれぞれの言語認識について概略を述べておきたい。

### 【言語認識の構制】

一般に文法学派は動詞語根によって表示される意味が文における主要素であると主張する (dhātvartha-mukhyaviśeṣyaka-śābdabodha)。文を限定・被限定関係から成立するものとした場合、動詞語根の意味が被限定者 (viśeṣya) であり、他の要素はそれに対する限定者として構制化される。(動詞形は動詞語根部分と人称語尾部分とに分割されるが、文法学派は動詞語根によって表示される意味を中心に捉え、ミーマーンサー学派は動詞人称語尾によって表示される意味を中心とする [ākhyātārtha-mukhyaviśeṣyaka-śābdabodha])。文法学派は動詞語根に二つの意味―「活動 (vyāpāra)」と「結果 (phala)」―を認め、後期文法学派の中でもバットージ・ディークシタ (Bhaṭṭoji Dikṣita, ca. 1575-1640) とカーウング・バッタ (Kaunḍa Bhaṭṭa, ca. 1610-1660) は動詞語根に個別の意味表示能力を承認している。一方、ナーゲーシャ・バッタ (Nāgeśa Bhaṭṭa, ca. 1670-1750) は語根の二つの意味に限定関係を想定している。動詞人称語尾は能動文では行為主体 (kartṛ)、受動文では行為対象 (karman) を表す。行為主体は活動の基体であり、行為対象は結果の基体である。こうした意味表示関係に立って、例えばカーウング・バッタは能動文と受動文から得られる言語認識を次のように述べている。

『チャイトラは米を料理する』[という能動文] において「一つの米を基体とする軟化、そ[の軟化]をもたらす、一人のチャイトラと同一の基体があり、現在時に属する活動」が、[受動文]『米がチャイトラによって料理される』においては「一人のチャイトラを基体とし、一つの米と同一の基体にある軟化、それをもたらす現在時に属する活動」という認識が生ずる。(“taṇḍulam pacati caitra” ity atra “ekataṇḍulāśrayikā yā viklittiḥ,

tad anukūlaikacaitrābhinnāśrayikā vartamānā bhāvanā,” “taṇḍulaḥ pacyate caitreṇa” ity atra ca “ekacaitrāśrayikā ekataṇḍulābhinnāśrayikā yā viklittiḥ, tad anukūlā sāmpratīkī bhāvanā” iti bodhaḥ.)

[VBh on VMM, k. 2, p. 19].

動詞人称語尾は行為主体或いは行為対象、その数と時間を表示し、行為主体・行為対象はそれぞれ活動・結果に対する限定者として、また数は行為主体か行為対象に対する限定者、時間は活動に対する限定者として理解される。したがって、活動に対する限定関係は、数が行為主体或いは行為対象に連関させて理解され、その行為主体は活動に対する限定者（つまり活動の基体としてその活動を限定する）であるから、「ある数に限定された行為主体に存在する活動」という構造になる。この活動はまた時間的な制限があるから「現在時に属する活動」とされる。行為対象は結果に対する限定者であるから、「ある数に限定された行為対象に内在する結果」となる。この結果は活動から生じたものであるから両者は「能助関係 (anukūlatvasambandha)」を通して「結果をもたらす活動 (phala-anukūla-vyāpāra)」と理解される。

ナーゲージャは活動と結果に「生産関係 (janya-janakabhāva)」を二方向から想定しているので、能動文では「結果をもたらす活動」、受動文では「活動から生じた結果」という理解がされる。彼の言語認識を見ると次のようになる。

したがって、『チャイトラは村に行く』においては「単数性に制限された、チャイトラと異ならない行為主体を持ち、現在時に属し、村と異ならない行為対象に内在する結合、それをもたらす活動」、『マイトラによって村が到達される』においては「マイトラを行為主体とし、現在時に属する活動から生じた、村と異ならない行為対象に内在する結合」という認識が生ずる。(tathā ca grāmaṃ gacchati caitra ity atraikatvāvacchinacaitrābhinnakartṛko vartamānakāliko grāmābhinnakarmaniṣṭho yas saṃyogaḥ tad anukūlo vyāpāraḥ, grāmo gamyate maitreṇety atra tu maitrakartṛkavartamānakālikavyāpārajanyo grāmābhinnakarmaniṣṭhaḥ saṃyoga iti ca bodhaḥ.) [PLM, p.140].

バットージ・ディークシタとカーウンダ・バッタの主張では動詞語根の意味は活動と結果であると考えられていた。言語認識においてその主要素として構制されるものは、能動文・受動文共に、活動だけである。<sup>(3)</sup> そうすると、彼らの主張では言語認識から常に「結果をもたらす活動 (phala-anukūlavvyāpāra)」が得られ、その基体は行為主体に他ならない。無論、彼らはパーニニ文法学の人称語尾指示対象関係に立脚しているから、人称語尾によって表示されるものが能動文では行為主体、受動文では行為対象であることを十分に理解している。彼らが言語認識にあっては活動を主要素として定立するのは、「結果をもたらす活動」という動詞語根の二つの意味の間に一組の原因・結果関係 (kāryakāraṇabhāva) を想定するだけで文の認識構造を説明できるからである。彼らの主張に基づく、能動文では人称語尾によって表示される行為主体は因である活動に対して限定関係を持つものに対して、受動文では人称語尾の意味である行為対象が果である結果に対して限定関係を持つことになる。

この指示関係の捻れを批判したのがナーゲシャ・バッタである。彼は能動文では結果に制限された活動 (phalāvacchinnavyāpāra) を、受動文では活動に制限された結果 (vyāpārāvacchinnavyāpāra) を言語認識の主要素として立てるから、動詞人称語尾がそれぞれの構文において表示するものが言語認識の主要素の限定者として常に現れることになる。これはあくまで文を構成する要素の意味限定関係を直線的に反映させる形で言語認識の構造を定立するものである。

ナーゲシャの理解では言語認識の決定要因は行為主体・行為対象を表す接尾辞のうちどちらが当該動詞形に用いられているかである (VSLM I, 543: *tasmāt phalāvacchinne vyāpāre vyāpārāvacchinne phale ca dhātūnām saktiḥ. kartṛkarmārthakatattatpratyayasamabhivvyāhāraś ca tattadbodhe niyāmakam.* 「それ故、結果に制限された活動、或いは活動に制限された結果に対して動詞語根は意味表示能力を持つ。行為主体・行為対象を表す接尾辞が共用されていることがそれぞれの言語認識における決定要因である」)。

他方、新論理学派による言語認識は第1格語尾が添加された語の意味を限定

関係の主要素と見なす。動詞語根は活動と結果を表し、動詞人称語尾は「努力」〔 $kṛti$ , [pra-]yatna) を表示するものとする。<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup> ガンゲーシャは次のように述べている。

動詞人称語尾は努力の表示者であるから、無生物に対して『車が動く』(ratho gacchati) という表現がされる場合、動詞人称語尾には〔車の〕活動を二次的に表示する能力 (lakṣaṇā) があるものとする。したがって、『料理する』という文では人称語尾が努力を表示する。『料理する』という表現は『料理行為を行う』(pākaṃ karoti) というように努力の意味をもつ動詞 $\sqrt{kr.}$ によってパラフレイズされるからである。(ākhyātasya yatnavācakatvād acetane ratho gacchatitīyādaḥ ākhyāte vyāpāralakṣaṇā. tathā hi pacatitīyādāv ākhyātasya yatno vācyaḥ pacati pākaṃ karotitīyādiyatnārthakakarotinā sarvākhyātavivaraṇāt.) [TC, Ākhyātavāda, vol. 4 part 2, p.819]

新論理学派の言語認識は、例えば能動文「チャイトラは米を料理する」(taṇḍulam pacati caitraḥ) では「米に存在する特定の結果を生ずる、〔現在時の〕活動に対する努力を有するチャイトラ」であり、受動文「米がチャイトラによって料理される」(caitreṇa pacyate taṇḍulah) では「チャイトラに存在する努力によって生まれた活動によって生じた結果の基体である米」という認識が得られる。<sup>(6)</sup> この場合、動詞人称語尾は努力を表示するが同時に数 (saṃkhyā) と時間 (kāla) をも表示する。数は第1格を添加された名詞項目の数と一致し、その意味に対する限定者である。時間は努力の限定者とされる。動詞語根によって表示された意味のうち活動は努力に対して限定関係を持ち、結果は行為対象によって限定される。努力は属性 (guṇa) であるからその属性保持者が必然的に想定される。属性保持者とはその属性の基体に他ならないから、活動に限定された努力の基体が行為主体と理解される。一方、結果と活動の関係を逆に考えた場合、結果という何らかの状態はそれが拠って立つものを予想させ、それは結果の基体である。したがって、彼らの言語認識は能動文では行為主体に、受動文では行為対象に主眼が置かれるが、それは認識の因果関係で言えば、第1格が添加された項目によって想起される意味に他なら

ない。そういう点で彼らの言語認識は「第1格が添加された項目の意味を主要素とする認識」(prathamāntārtha-mukhyaviśeṣyaka-sādbodha) と呼ばれるのである。

### 【行為主体概念】

行為主体 (kartṛ) はパーニニの規定に従えば「[行為が成される時に] 自立であるもの」(svatantraḥ kartā [P.1.4.54]) である。この規定に関して述べられた、次に挙げるバルトリハリ (Bhartṛhari, ca. 5-6 c.) の理解が文法学派の行為主体性定義として承認される。

「1) [他のkāraḥが働く] 以前に [既に] 自己の能力を獲得していること、2) [他のkāraḥを自己に対して] 従属的に扱うこと、3) その指示によって [他のkāraḥが] 働くこと、4) [既に] 働いているものを停止させること、5) [行為主体の] 代用になるものが見られないこと、6) [他のkāraḥが] なくても [それがあることが] 見られること、以上のことから、たとえ離れた所から補助となるとしても、行為主体の自立性が認められる。」(prāganyataḥ śaktilābhān nyagbhāvāpādanād api / tadadhīnapravṛttivāt pravṛttānām nivartanāt // adṛṣṭatvāt pratīdheḥ praviveke ca darśanāt / ārād apy upakāritve svātantryaṁ kartur ucyate //) [VP III. 7.101-102].

カーラカ (kāraḥ) とは行為が達成される場合にその行為を構成する様々な能働者<sup>(7)</sup>を意味する文法概念である。行為の構成者はその機能に応じて6種に区別され、更に特定の統語論的文法要素が導入され、文中に表現される。行為主体はバルトリハリに見られるように、他のカーラカに先行して能力を発揮するものでありそれらを動かさうるものである。勿論、個々のカーラカはそれ自身としては主体として見なされるが、行為全体の達成からは行為主体<sup>(8)</sup>に対して従属的なものである。<sup>(9)</sup>

さて古典論理学派の述べる所では行為主体とは次のようなものである。『ニヤーヤ・スートラ』に対するヴァーツヤーナ (Vātsyāyana, ca. 350-450)

の註釈書『ニヤーヤ・パーシャ』では「木が立っているという文においてそれ自身の立つ事に関して自立的であるものが行為主体である」(vr̥kṣas tiṣṭhatīti svasthitau svātantryāt karttā) [*Nyāyabhāṣya* on NS 2.1.16, p.434]とされ、これに対するウドゥヨータカラ (Uddyotakara, ca. 500–600) の複註『ニヤーヤ・ヴァールティカ』では更にこの自立性を「別のカーラカに依存しないこと (kārakāntarānapekṣatvam)<sup>(10)</sup>」とし、ヴァーチャスパティ・ミシュラ I (Vācaspati Mīśra I, ca. 9–10 c.) の複々註『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』では「他のカーラカによって使役されないものであること、そして他のカーラカに使役者であることが行為主体の自立性であると言われる<sup>(11)</sup>」として、行為主体を諸カーラカの中の同等の一つとしてではなく最も優位性を持つものとして認めている。これは先のパルトリハリの理解に一致する。<sup>(12)</sup>

ところで新論理学派は行為主体というものがいかなる関係性の下に制限されているかという観点から言語項目とその表示する意味との関係に立ち戻って検討する。いかなる概念も何らかの関係性の中に成立するから、行為主体性概念も単に自立的であるという機能論的な規定では不充分なのである。

本稿が扱うのは新論理学派の中でおそらくは最も早い時期に統語論概念を主題とする独立の著作を残したバヴァーナンダ・シッダーンタヴァーギーシャ (Bhavānanda Siddhāntavāgīśa) の『カールカ・チャクラ (*Kāraṇa-cakra*)』の第2節である。この節はその主題を「行為主体性」において主として文法学派の見解を排斥しながら自説を展開する。最後になったが、本稿で扱われる問題について筆者は和田 [1989, 1990, 1993, 1995] と小川 [1990] による考察から様々な示唆を得ている。また和訳は、筆者がインド留学中に V. N. Jha 教授(プーナ大学サンスクリット高等研究所所長)と本テキストを読解した際の英訳ノートに基づいている。ここに記して謝意を表したい。言うまでもなく、和訳・解説について誤理解があるとすれば、それは筆者の責任である。



## 資料

【著者】新論理学派はガンゲーシャ (ca.1300-1360)<sup>(13)</sup> に始まるミティラー派とヴァースデーヴァ・サルヴァバーウマ (Vāsudeva Sārvabhauma, ca. 1430-1540) に始まるベンガル派に大別されるが、バヴァーナング・シッダーンタヴァーギーシャはベンガル派に属する。しかし彼の年代は確定していない。彼の師弟関係にも伝承に混乱が見られる。

D. C. Bhattacharya [1958, p.154] に依れば、バヴァーナングはクリシュナダーサ・サルヴァバーウマ (Kṛṣṇadāsa Sārvabhauma, ca.1500-1560) の弟子とされ、一方Mishra [1966, p.426] は、別説としてラグナータ・シローマニ (Raghunātha Siromani, ca. 1500) の弟子であるとする伝承を挙げている。また、Kaviraj [1982, p.83] は、ラグナータの弟子であるマトゥラーナータ・タルカヴァーギーシャ (Mathurānātha Tarkavāgīśa, ca. 1540-1600) の弟子としながらも、それはラグナータの死後にマトゥラーナータについて更に研究を進めたのであると考えている。いずれの伝承もバヴァーナングをラグナータ以後とすることを除けば一致せず、したがって我々としては彼をラグナータ (16世紀前半) よりそれほど遅くない時期に活躍した学者であると暫定的に位置づけておく。D.C.Bhattacharya [1958, p. 7] に報告されている、バヴァーナングの孫ルドラ (或いはラーマルドラ)・タルカヴァーギーシャ ([Rāma-] Rudra Tarkavāgīśa) がラグナータの著作 *Tattvacintāmaṇi-Dīdhiti* に注釈を書いたのが1660年であるという写本の奥書が信頼出来るものだとすれば、バヴァーナングは少なくとも16世紀半ばには活躍していたことになる。これを考慮すると、G. Bhattacharya [1978, p. 8] が設定するca.1520-1580、Matilal [1977, p.109] の立てるca. 1570という年代が今の所は可能性が高いように思われる。

【著作】彼の主たる著作はTC関連の註釈・複註書と単独の著作の二種に分けられる。

1. a. Gaṅgeśa, *Tattvacintāmaṇi* に対する注釈 (*Bhavānandī*)
1. b. Jayadeva Pakṣadhara Miśra, *Tattvacintāmaṇi-Āloka* に対する注釈 (*Mañjarī*)
1. c. Raghunātha, *Tattvacintāmaṇi-Dīdhiti* に対する注釈 (*Bhavānandī* or *Gūdhārthaparakāśa*)
2. a. Raghunātha, *Ākhyātavāda* 及び *Nañvāda* に対する注釈
2. b. *Kāraṇatāvicāra*
2. c. *Śabdārthasāramāṇjarī*
  2. c. 1. *Kārakacakra*
  2. c. 2. *Samāsavāda*
  2. c. 3. *Dāśalakāravādārtha* or *Lakārārthanirṇaya*

1 は新論理学文献に対する注釈書であり、2 は文法学或いは言語哲学に関する著作である。2. b. に関しては、現在のところその写本のみが伝わるだけでどの分類に属させるべきか決定できない。2. c. は KC の写本の奥書から推測すれば、彼の文法に関わる著作の全体を総称するようなものであったと思われる。例えば、Bhandarkar Oriental Research Institute 所蔵の写本のうち、写本の末尾を欠くものを除けば、次のような奥書が一貫して見出される。

iti śabdārthasāramāṇjaryāṃ bhavānandasiddhāntavāgīśaviracitaṃ  
ṣaṭkārakavivecanaṃ samāptam. (以上で、『シャブダールタ・サーラ・  
マンジャリー』における、バヴァーナナダ・シッダーンタヴァーギーシャ  
によって説かれた『シャットカーラカ・ヴィヴェーチャナ』<sup>(15)</sup> 終わる。)

したがって、『カーラカ・チャクラ』は『シャブダールタ・サーラ・マンジャリー』の一部をなすものであったと考えてもよいと思われる。

【『カーラカ・チャクラ』】本稿で取り扱う『カーラカ・チャクラ』のこの題名は実際には出版本に見られるだけである。一方、様々な写本目録では殆どこの題名では分類されておらず、奥書にある『カーラカ・ヴァーダ (*Kārakavāda*)』、『(シャット) カーラカ・ヴィヴェーチャナ ([*Ṣaṭ-*]  
*Kārakavivecana*)』、『カーラカーディ・アルタ・ニルナヤ (*Kārakādyarthanir-*

『*ṇaya*』と呼ばれていたようである。<sup>(16)</sup>『カーラカ・チャクラ』というテキストは同じく新論理学派のヴィシュヴァナータ・パンチャーナナ (Viśvanātha Pañcānana) にもあるとされているが、本稿筆者は未見である。また内容的に重複するテキストとしてジャヤラーマ・ニヤーヤパンチャーナナ (Jayarāma Nyāyapañcānana, ca. 17th c.) の『カーラカ・ヴァーダ<sup>(17)</sup>』*(Kārakavāda)*』がある。

【テキスト出版】KCの主たる出版は以下の通りである。

1. Ed. by Mahadeva Gangadhara Bakre, in *Vādārthasaṃgraha*, part 2, Bombay: The Gujarati Printing Press, 1914, pp. 1-23;
2. Ed. by Sudhāṃśusekhara Bhaṭṭācārya, Calcutta, 1923;
3. Ed. by Brahma Śaṅkara Sāstrī, Haridāsa Saṃskṛta Granthamālā No. 154, Benares: Chowkhamba Sanskrit Office, 1942.

更にKumar [1992, pp.236-7] によれば次の二書が出版されているとされるが本稿筆者は未見である。

4. Ed. by Śrī Rāma Śāstrī Bhaṭṭācārya, with Commemories, the *Raudrī* of Rudra and the *Mādhavī* of Mādhava, Vanī Pustakālaya, Calcutta, 1319 (Bengal Date).
5. Ed. by Tārānātha Nyāyatarkatīrtha, with the *Mādhavī* and Bengal Notes, Chātra Pustakālaya, Calcutta, 1937.

【写本】写本は数多く存在する。(本稿ではB. O. R. I所蔵の写本8本を使用している。)

【註釈書】KCに対する註釈書のうち出版されているものは以下の通り。

1. Mādhava Tarkālāṅkāra, *Mādhavī*. [in 2, 3, 4, and 5]
2. Rāmarudra Tarkavāgīśa, *Raudrī*. [in 4]

上記以外にBhavadevaによる註釈書の写本が存在すると報告されているが本稿筆者は未見である。(注16を見よ。)

【研究】Das [1987] はKC第1節 *kāraṇatva* から第4節 *karaṇatva* までの研究であるが、これはサンスクリット語で書かれた、現時点では未出版の博士論文である。(Das [1992] は言語認識に果たす文法的要素を論じる中でKCの論説を援用している。) またKumar [1992] はヒンディー語によるKCの研究書である。また部分的には第1節の *kāraṇatva* について Matilal [1990(a)] に翻訳研究があり、第4節 *karaṇatva* が Matilal [1985] に論じられている。

翻訳に際してはKC (3)を底本とし、テキスト分割もそれに従っている。分割されたテキストの番号は第1節からの通し番号になっており、第2節「行為主体性」はNo. 7より始まる。KC (1) [=Abbr. B]、(2) [=A] とのテキスト間に異同がある場合には各分割テキスト下に示した。読みについて随時写本を参照している。

### 『カーラカ・チャクラ』

#### 第2節《行為主体性の考察》(*Kartṛtvavivecanam*)

[Text 07]    *tatra “kriyāśrayatvaṃ kartṛtvam” iti vaiyākaraṇāḥ. teṣāṃ  
ayam āśayaḥ -- yaddhātūttarākhyātena \*<sup>1</sup> yaddhātvarthānvitatādṛśa \*<sup>2</sup> -  
dharmavattvaṃ bodhyate, tādrśadharmavattvaṃ eva tat-kriyākartṛ-  
tvam.*

1. A.B.ad. *yaGādyasamabhiyāhṛtena*. Read as A and B. 2.A. *-yādrśa-*. B. *-yad-*.

和訳：文法家によれば、「行為の基体であること」が行為主体性である。彼らの意図は次の通り：受動活用標識 *yaK* 等を伴わない語根に添加された人称語尾によって、その語根の意味に関連した或る特性を有することが理解される。その場合のその特性を有するものであることがその動作の行為主体性である。

解説：「語根の意味に関連した或る特性」とは実際には動詞語根によって表さ

れる意味である結果 (phala) と活動 (vyāpāra) に関わる性質を意図している。文法学派ではこの両者を語根の意味として認めている。今ここの言われる「特性を有するものであること」(tādṛśadharmavattva) とは、[基体となる] 性質 (-dharma-) を有するもの (-vat-) であること (-tva) を意味している。「或る特性を有するものであること」とは「その特性の基体であること」に他ならないから、行為主体性定義で意図されているものは実際には動詞語根によって表示された意味の基体性なのである。或る基体は他のものからそれらとは異なるものとして限定されるから、その限定者となるものがここで定義されているわけである。行為主体性の定義に用いられる各用語をこの基体性という点に対応させて示すと以下の通りになる。

dharmā		[vyāpāra ; phala]
dharmā-vat	āśraya	[vyāpāra-vat ; phala-vat]
dharmā-vat-tva	āśraya-tva	[vyāpāra-vat-tva ; phala-vat-tva]

この対応から明確なように、「或る特性を有すること」は「基体性」と同置される。<sup>(19)</sup> 言語認識において動詞語根に表示される意味を主要素として構制する文法学派の立場からは、動詞語根の意味である「活動」或いは「結果」のいずれかが認識の主要素となる。それらの基体となる特性を有するものとは活動の基体或いは結果の基体であるから、行為主体性は「活動の基体性」或いは「結果の基体性」を意味するのである。

文法学派では活動の基体が行為主体とされ、結果の基体は行為対象であると考えられている (VBhS on VMM, k. 2 [p.28] : phalāśrayaḥ karma, vyāpārāśrayaḥ karttā<sup>(20)</sup>). もし何の条件もなく行為主体性を「動詞語根の意味に関連した或る特性を有するものであること」と定義してしまうと、この定義は行為主体だけでなく行為対象をも被定義項として包括してしまうことになる。文法学派では受動標識 yaK が挿入された動詞活用形はその人称語尾によって行為対象を表示するとされており、また受動活用標識を伴わない活用形では人称語尾は行為主体を表示するとされる。<sup>(21)</sup> 「動詞人称語尾によって」理解されるものがこの定義に意図されている以上、能動文と受動文では人称語尾が表示するものが異なるのであるから、「受動活用標識 yaK を伴わない」という条件

が絶対的に必要なのである。こうした文法要素とその表示対象の關係に立てば、この条件の存在によってここでの定義は動詞語根によって表される活動の基体性が行為主体性であると確定されるのである。バットー・ジ・ディークシタの行為主体性定義は次のようなものである。

「行為に関して自立的であるものとして意図されるものが行為主体である。動詞語根に表された活動の基体であることが自立的であることである。」(kriyāyām svātantryeṇa vivakṣito 'rthaḥ kartā syāt. dhātūpātavyāpārāśrayatvaṃ svātantryam.) [ŚK on P. 1.4.54, II, p.139, ll. 10-11]

[Text 08] evaṃ ca<sup>\*1</sup> “pacati” ityāda<sup>\*2</sup> pākānukūlavyāpāravattvaṃ, “jānāti” ityādāv āśrayatvaṃ, “naśyati” ityāda<sup>\*3</sup> pratiyogitvaṃ tatkriyānirūpitatvaṃ<sup>\*3</sup> tattatkriyākartṛtvaṃ.

1. B. om. 2. A. om. *pāka-*. 3. A. *-tam*, B. om. Read as A.

和訳：同様に、「料理する (pacati)」等において、調理に参与する活動を有すること (pākānukūlavyāpāravattva) が、「理解する (jānāti)」等においては基体性 (āśrayatva) が、「消滅する (naśyati)」等においては否定項性 (pratiyogitva) がその行為によって制限される個々の行為の行為主体性である。

解説：Text07 では行為主体性が動詞語根の意味である活動の基体であることと定義されている。ところが用例によっては行為主体性を「活動の基体性」という形では理解出来ない場合がある。例えば、ここに挙げられる第1例 “caitraḥ pacati” から “viklitti-anukūla-[pākārūpa]-vyāpāra” が認識されるとして、料理活動 (pāka) は実際には米の上に生ずるものである (即ち、米を基体として行われる) から、行為主体であるチャイトラを基体とするものではないという反論が可能になる。即ち、もし料理活動が米の上に生ずるものであると考えた場合、米は料理活動の基体であるからそれに行為主体性を認めざるを得ないという定義の過剰適用 (ativyāpti) を招き、適用されるべきチャイ

トラを含まないという過小適用 (avyāpti) が生じてしまう。こうした反論を先取りする形で各用例における、文法上での行為主体と見なされるものの内容が論じられる。

(1) caitraḥ odanaṃ pacati. 「チャイトラは米を料理する」

$\sqrt{\text{pac}}$  の意味は「軟化をもたらす活動」(viklitty-anukūla-vyāpāra) である。結果はこの場合「軟化」のことで行為対象の側に見られるから、結果の基体は米である。活動は「火を起こし・火力の調整」といったもので、この場合チャイトラに存在する。この時の行為主体性は「活動を有するもの (vyāpāravatva)」として理解される。

(2) caitraḥ ghaṭaṃ jñāti. 「チャイトラは壺を知る」

$\sqrt{\text{jñā}}$  の意味は「知識をもたらす我と意識の結合」(jñāna-anukūla-[ātma-manahsaṃyoga-rūpa-]vyāpāra) と理解される。結果である知識は行為主体の側に内属関係 (samavāya) で存在するが、それは対象性の関係 (viśayatāsambandha) によって対象である壺と結びついている。その限りにおいて壺は結果の基体でもあり得ることになる。活動は明らかに我の側にあるから行為主体に存在する。知識及び我と意識の結合が内属関係によって行為主体に存在することによってそうした活動の基体性 (āśrayatva) が行為主体性として知られる。

(3) ghaṭaḥ naśyati. 「壺が壊れる」

$\sqrt{\text{naś}}$  の意味は「消滅を生む (破壊などの) 活動」である。壺はそれが消滅することを知らしめるものであるから否定項 (pratiyogin) であり、否定項であることとの関係 (pratiyogitāsambandha) によって消滅は壺に存在すると言うことが出来る。活動は結合関係 (例えば棒などによって叩かれること、この時壺と棒は結合関係で結びついている) を通して同じく壺に存在するから、壺という同一基体に活動と結果が存在することになる。壺が消滅を知らしめるモノであることによって行為主体性は否定項性 (pratiyogitā) として理解される。

さて、動詞語根は結果と活動の両者を表示するが、その意味表示能力は動詞が自動詞であるか他動詞であるかに左右されない。活動の基体は行為主体であり、結果のそれは行為対象であるとすれば、行為対象を必ずしも必要としない

自動詞は動詞語根の意味として結果を表示出来ないという問題が一見したところ生ずるかに思える。しかし、動詞語根は自動詞・他動詞の区別に関わりなく活動と結果を表示するのであると考えられている。自動詞・他動詞の区別はパーニニ学派では次のように定義されている。

「他動詞性とは活動とは異なる基体中存在する結果を表示することである。

自動詞性とはそれ [=活動] と同一基体中存在する結果を表示することである。」(sakarmakatvaṃ ca vyāpārayadhikaraṇaphalavācakatvaṃ, tatsamānādhikaraṇaphalavācakatvaṃ cākarmakatvaṃ) [VSM, p.40].

換言すれば、活動の基体と結果の基体が別異であるときにはその動詞は他動詞であり、活動と結果が同一基体に認められる場合は自動詞とされる。Text 08 で挙げられる動詞を自動詞・他動詞という区分に立って活動と結果、そしてそれらの基体を分析すると以下ようになる。第1例では結果と活動の基体は異なるから√pac-は他動詞である。第2例では結果である知識は認識対象である壺の側に存在すると見なされるから、結果の基体と活動の基体は異なるという。その限りにおいて、√jñā-は他動詞として扱われることになる。<sup>(22)</sup>第3例は結果である消滅と消滅をもたらす活動が共に壺の側に結びついているのでその限りにおいて√naś-は自動詞である。<sup>(23)</sup>

[Text 09] yaGādyasamabhivyāhr̥teneti viśeṣaṇāt\*<sup>1</sup> “pacyate taṇḍula”  
ityādaṁ pākajanyaphalāśrayatvena taṇḍulāder bodhān\*<sup>2</sup> na tasya  
kartṛtvam.

1. B. -karaṇāt. 2. B. bodhanān.

和訳：「受動活用標識 yaK 等に伴わない」という限定があるから、「米が料理される (pacyate taṇḍulaḥ)」等の〔受動文〕では、「米」等は調理から生じた結果の基体であると理解されるが故にそれ [=米] には行為主体性は存在しない。

解説：Text07 に提示された文法学派の行為主体性定義では「受動活用標識 yaK に伴わない」という条件が加えられている。パーニニ文法学では人称



語尾はP. 3.4.69により行為主体、行為対象或いは動詞語根の意味 (bhāva) のいずれかを表示するものとされている。もし、いかなる文でも、人称語尾によって動詞語根の意味の基体であるモノが知られるとすれば、結果は動詞語根の意味の一部であることによって、結果の基体が人称語尾から知られてもよいことになる。これは文が受動文の場合は正しいのだが、能動文では誤りになる。したがって動詞語根が表示する意味のうち、今問題とされている行為主体性に係わるものとして活動だけが取り出されるためには「受動活用標識 yaK に伴われない」という条件が必要とされるのである。

条件中に -ādi- とあるのは受動活用だけでなく以下の形式を含意している。バットージ・ディークシタは結果の基体を表示する活用を次のように挙げている。[VMM, kārikā 3]。

「活動と結果のうち、アートマネパダ語尾 -taṆ、受動活用標識 -yaK そしてアオリスト標識 -CiṆ 等は結果の基体に対する関係を指示する。他方、現在形挿入接辞 ŚaP, ŚnaM 等は活動の基体に対する関係を指示する。」

(phalavyārārayos tatra phale taṇyakciṇādayaḥ / vyāpāre śapśnamā-dayas tu dyotayanty āśrayānvayam.)<sup>(24)</sup>

人称語尾 -taṆ は第1次活用語尾のアートマネパダ語尾全体を表す (P. 1.4.100: taṆānāv ātmanepadam)。受動標識 -yaK は P. 3.1.67 (sarvadhātuke yaK) に規定される。アオリスト標識 CiṆ は非人称・受動活用の時に導入される (P. 3.1.66: CiṆ bhāvakarmaṇoḥ)。以上は構文の態という区分では非人称 (bhāve) と受動 (karmaṇi) を組成するときに導入される。(非人称構文は自動詞にアートマネパダ語尾が添加され語根の意味だけを表現する構文であるから行為主体・行為対象という問題からは除外するものとする。) 挿入接辞 ŚaP は能動文において第1種動詞語根末に挿入される/-a/である (P. 3.1.68: kartari ŚaP)。同様に ŚnaM は第7類動詞語根末に挿入される/-na-/である (P. 3.1.78: rudhādibhyaḥ ŚnaM)。

さて受動形 pacyate [3rd, sg. Pass.] の派生分析は以下のようになる。

ḌUpacĀṢ : Dhp. I.1045, pāké

√pac-	+l-	P. 3. 4. 69 [動詞活用導入<受動選択>]
pac-	+lAT	P. 3. 2. 123 [現在形選択]
pac-	+tiÑ	P. 3. 4. 78 [l-に対する人称語尾代用]
pac-	+taÑ	P. 1. 3. 13; 1. 4. 100 [アートマネパダ語尾選択]
pac-	+ta	P. 1. 4. 22, 108 [数<sg.>;人称<3rd>選択]
pac-	+te	P. 3. 4. 79 [-taの/a/に/e/代置]
pac- +yaK	+te	P. 3. 1. 67 [受動標識 yaK 挿入] <sup>(25)</sup>
pac-ya-te		

人称語尾は受動文では行為対象を表示するから、その文中では行為対象は表示済みである。パーニニ文法では何らかの要素によって既に表示された意味は別の要素によって再び表示されないから、具体的な行為対象を表す語は文中で単に語の意味を提示するのに用いられる第1格を導入され (Vt I on P. 2.3. 46: prātipadikārthalingaparimāṇavacanamātre prathamālakṣaṇe pada-sāmānādhikaraṇya upasamkhyānam adhikativāt)、その第1格を導入された名詞項目は人称語尾に表されるものと意味上同格になる。一方、行為主体は動詞人称語尾を含む文中のどの要素によっても表示されていないので (P. 2.3. 1: anabhihite) 行為主体を具体的に表す語に行為主体を表す第3格が導入される (P. 2.3.18: kartṛkaraṇayos tṛtīyā)。したがって、「米がチャイトラによって料理される」という文は“odanaḥ pacyate caitreṇa”となる。

[Text 10] “kāṣṭhaiḥ sthālyām odanaṃ pacati” ityādaḥ karaṇādhikaraṇakarmanām kriyānvitakaraṇatvādī\*<sup>1</sup> dharmavattve 'pi sa dharmo nākhyāta\*<sup>2</sup> pratipādyah. yadā tu \*<sup>3</sup>tatātparyeṇākhyātam prayujyate, tadā\*<sup>4</sup> “kāṣṭham pacati”\*<sup>5</sup> ityādaḥ teṣām\*<sup>6</sup> kartṛtvam\*<sup>7</sup> iṣṭam eva.

1. B. -tad-. 2. B. -tena. 3. A. tattattāt-. B. tattāt-. 4. B. om. 5. B. ad. sthālī pacati. 6. B. tadā. 7. B. ad. tadā.

和訳：「彼は薪によって鍋の中で米を料理する (kāṣṭhaiḥ sthālyām odanaṃ

pacati)」という文において、行為手段〔である薪〕、行為基盤〔である壺〕、行為対象〔である米〕は行為に関連した手段性〔基盤性・対象性〕という〔それぞれの〕特性をそれぞれ有しているのだが、そうした特性は人称語尾からは知られない。しかし、人称語尾が話者の表現意図に従って用いられる場合、「薪が料理する (kāṣṭhaṃ pacati)」という文においてそれら〔薪等の行為手段〕に行為主体性〔が想定されるのは〕正しい。

解説：表現意図とは料理行為における様々な局面のうちどの局面を中心に言語表現するかに関する発話者（表現者）の意志・意図のことである。例えば「チャイトラは薪によって鍋の中で米を料理する」という認識から、米を加熱する局面に注目してその担い手の役割を強調しようと意図したとすれば、発話者は「薪が〔米を〕料理する（＝加熱する）」という文を発することになる。この時、発話者には料理に関わる加熱活動の主体としての薪がこの文における行為主体として理解されているのである。また料理が行われる場を強調することによって、米が料理されることを支えるものとして鍋がその活動の主体として措定され、「鍋が料理する（＝煮えている）」(sthāli pacati) という文を派生させることになる。一見したところ行為の補助手段として見なされるものにも行為全体を構成する個別の活動の主体性を強調しようとする場合にはそれに文法上の行為主体性を認めることが可能なのである。いずれの場合でも活動の内容を行為全体の中から特定すれば「(例えば、加熱する活動・支える活動という) 動詞語根の意味に関連した特性を有するものであること」が薪・鍋には想定できることになるから、Text07 に提示された行為主体性定義に逸脱しないのである。

こうした考え方はすでにカーティヤーヤナとパタンジャリによって論じられており [MBh ad P. 1.4.23, I, 324, 17-325, 3]、また P. 1.4.23 に対する註釈でパットージ・ディークシタも次のようにまとめている。[ŚK on P. 1.4.23, II, 114, 2-7]

「軟化をもたらす活動が語根√pac-の意味である。活動はまた種々の相を持っている。そのうち、〔鍋を火元に〕置き・米を〔それに〕入れ・

燃料〔となる薪〕を加えたり・〔火力をおとす為に薪を〕引き出したり・〔火を〕燃え上がらせたりという〔活動〕が意図されている場合はその〔活動の〕基体であるデーヴァダッタが行為主体である。[そのとき文は“devadattaḥ pacati”となる。]加熱することが意図されている場合は燃料 (edha) が行為主体となる。[そのとき文は“edhāḥ pacanti”となる。] 米を〔その中に〕保っておくという活動が意図される場合は鍋 (sthāli) が行為主体である。[そのとき文は“sthāli pacati”となる。] 砕けて小さくなることが言われる場合、米が行為主体である。したがって、行為対象より転じた主体・行為手段より転じた主体という用法があり得るのである。」(viklittyanukūlavypāro hi pacyarthaḥ. vyāpāraś cānekadhā. tatra pacer adhiśrayaṇataṇḍulāvapanaidhopakarṣaṇāpakarṣaṇaphūtkārādītātparyakatve tadāśrayo devadattaḥ kartā. jvalanātātparyakatve tv edhāḥ kartāraḥ. taṇḍuladhāraṇādiparatve sthāli kartrī. avayavavibhāgādiparatve taṇḍulāḥ kartāraḥ. ata eva karmakartā karaṇakartetyādi vyavahāraḥ.)

[Text 11] tathā “pacyata odanaḥ svayam eva” ityāda<sup>\*1</sup> karmakartary odanādeḥ karmaṇo ’pi kartṛtvaṃ, tatra hi svavṛttivyāpārajanya-pākajanyaphalaśāly odana iti śabda<sup>\*2</sup> bodhaḥ, <sup>\*3</sup> odanapadottara-prathamāyā vyāpāro lakṣaṇā’rthaḥ<sup>\*4</sup>.

1. A. -ādi-. 2. A. om. śabda-. 3. A. ad. tatra. B. ad. evam ca. 4. A. om. lakṣaṇā’rthaḥ. B. lakṣaṇayārthaḥ.

和訳：したがって、「米がそれ自身柔らかくなる (pacyata odanaḥ svayam eva)」等の反射構文 (karmakartari) において、米は〔実際は料理行為の〕対象であるとは言え、行為主体性を有する〔ものとして見なされる〕。この場合の言語認識は「それ自身に存在している活動によって生じた料理活動によって生まれた結果の拠り所である米」である。この場合、活動が odana という語に用いられた第1格によって示唆される。

解説：Text10 では行為主体性を行為手段や行為基盤に付与する可能性とその妥当性が論述されたのであるが、行為対象には行為主体性が付与されうのかがここでの問題となる。行為全体の一局面を取り上げてその担い手に行為主体性を認め得るのだとすれば、行為の行われる一連の流れの中で行為対象の担う役割を特定するだけで行為対象には行為主体性を付与でき、或る文では行為対象として表現されていたものも別の文では行為主体として表現されるはずである。サンスクリット語では特に行為対象が行為主体として表現される形式を持っており、それは「反射構文 (karmakartari)」と呼ばれる。

反射構文はP. 3.1.87に規定される (karmavat karmanā tulyakriyāḥ 「行為対象と等しい行為を有する [行為主体は (kartā #68)]<sup>(26)</sup> 行為対象として [文法上は見なされる])。この規則は動詞の活用形態に関する限り受動活用と同じ形態を派生させる拡大適用を規定したものであるが、受動活用形から理解される意味とは異なる意味がここでは意図されている。形態上では受動形を導入する規則であり、また行為対象と一旦は指定されるものを更に行為主体として見なすのだから、この規則は能動文を基礎構文として前提していることになる。通常の能動文において行為対象に見られる行為の所作（即ち、結果）があたかも行為対象が自ら行ったかの如く見なされる場合、行為対象はその所作の主体として一旦は指定される。この新しい行為主体は次いで文法上の操作を加えられるが、その操作はあくまで行為対象を表示する受動活用に準ずるものとなる。

odanam pacati caitrah 「チャイトラは米を料理する」

この能動文では行為主体は人称語尾 ti によって表示され、それは第1格が導入された名詞項目の表す意味と不異 (abheda) である。行為対象を表す名詞項目には第2格が導入されている。ここから得られる言語認識は既に挙げたように「単一のチャイトラと同一であるものを基体とし、米を基体とする軟化をもたらし活動」である。行為主体・チャイトラは活動・火の操作等の基体であり、その活動によって結果・軟化が行為対象・米を基体として生ずる。さて、行為対象・米に見られる行為の結果は「米が柔らかくなる」という意味で理解することが出来る。その軟化は何か別のものによってもたらされるとは言え、

米自身の変化として米に直接関わりあうものである。この時、その所作を中心的に捉えることによって軟化という結果は米自らの活動によってもたらされたものとされる。その活動とは米自身に存在する「火との結合 (taṇḍulāva-yavāgnisamyoga)<sup>(27)</sup>」である。したがって、米は結果・軟化の基体であると同時に活動・火との結合の基体でもあることになる。こうして行為主体性が能動文における行為対象に付与される。ここでは行為全体を構成する諸活動のうち行為対象が担うとされる或る特定の部分的活動だけが取り出されて、その活動を有する能動文の行為対象が反射構文においては行為主体性を確保するのである。

ところでこの意味論的な措定は構文化において次のように処理される。能動文における行為対象は反射構文では意味論上は行為主体として見なされるのだが、文法的にはあくまで受動形を組成する操作が行われる。そうして出来上がる動詞形は全く受動形のそれと同じとなる。しかしP. 3.1.87が示すように、この規則の主辞は行為主体であるから、導入された人称語尾が表すものは行為主体である。

単純な受動文と比較すると、動詞形は全く同一である。そうした点で構文の基本構造である“odanaḥ pacyate”は反射構文と受動構文とにおいて同一であり、一見したところ構文の差異を明確にする為に反射構文では“svayameva”が更に加えられているように思われる。しかしP. 3.1.87そのものにはそうした副詞句の付加的使用は規定されていないので、これは構文上絶対的に必要なものとは考えられない。<sup>(28)</sup>

さて、以上のような反射構文が成立する為には少なくとも次の2点について考慮しておかねばならない。第1点は行為対象への行為主体性付与である。文法的には行為対象として措定されたものは構文の形式に関わらず行為対象として文法操作を受けるのが原則である。つまり、能動文における行為対象<米>は受動文においても行為対象であり、それが第2格によって表示されるか人称語尾によって表示されるかの統語論上の機能に応じた形態上の違いがあるだけである。しかし反射構文では統語論的要素導入の根拠である意味論的措定の段階において名詞項目・米へのラベル化が異なっているのである。そこでは米の

行為全体に占める位置づけが単純な能動文の場合とは異なって理解されて、行為主体且つ行為対象という二重のラベルが能動文の行為対象である米に付されているわけである。行為主体・米と行為対象・米とは基体として有する限定関係は異なっていることに注意しなければならない。それは次の第2点に係わる。

第2点は能動文の行為対象・米が行為主体性を付与される契機となる米への意味論的ラベル化を促す内容が動詞語根に表示される意味の中で保証されていなければならないということである。能動文として言語化される表現において行為対象と名付けられる項目が担うはずの動詞の意味は行為主体という新たなラベルに対しては全く同前というわけにはいかない。ラベル化はその項目が担う意味によって限定されるから同一の意味によって異なるラベルを導入することは出来ないのである。動詞語根が結果と活動の両者を表示することはこれまで見てきたとおりである。結果の基体として行為対象が理解される以上、行為対象が他方で行為主体と見なされるには行為主体が担うべき活動という意味が行為対象に存在していなければならないのである。それは例えば「火との結合」として示されるように、料理という行為全体を構成する副次的活動の一断面であり、それは確実に動詞語根の意味に含意されていなければならない。

こうして考えてくると、副次的活動のそれぞれの担い手が「最上位の<行為主体性>という<能力>に至る<能力>のヒエラルキー<sup>(29)</sup>」の中に位置づけられて行為手段・行為基盤等として名付けられる文法的仕組みが同時に行為対象を行為主体として見なす反射構文を派生させるのであり、それは動詞語根の表示するどの意味を担うのかという問題と直結している。したがって、我々としては反射構文における動詞の表示する意味を通常の能動文と同一なものとしては理解してはならない。副次的活動の担い手としての行為主体性が米に仮託されている以上、副次的活動を排他的に取り出さなければならないのである。反射構文は「米が自ら料理する」のではなく「米は自ら柔らかくなる」を意味する、即ち他動詞「料理する」は自動詞「柔らかくなる」なのである。

この反射構文の言語認識をカーウンダ・バツタは次のように述べている。

『米が自ら柔らかくなる』という文では『単一の米に異ならない基体を持ち、料理活動をもたらし活動<sup>(30)</sup>』が理解される」(“pacyate odanah

svayam eva” ity atra ca “ekaudanābhinnāśrayikā pākānukūlabhāvanā” iti bodhaḥ.) [VBh on k. 4, p.22].

この言語認識を Text11 のそれと比較すれば、言語認識の主要素として構制されているものが異なっていることが判る。カーウンダ・バッタは動詞語根の活動を主要素としており、一方 Text11 は行為対象・米を主要素としている。この言語認識は明らかに新論理学派のものである。

では、米が活動の基体である行為主体でありながら、結果の基体である行為対象であると見なされる構文において動詞の意味はどの要素によって限定されるのか。文法学派では動詞人称語尾が行為主体を表示し、それは活動を限定すると考えられている。人称語尾が行為対象を表示する時は結果に対する限定者となる。カーウンダ・バッタの言語分析では米が基体として挙げられているが、活動の基体が行為主体である限り、活動を主要素と構制するならばここに言われる基体とは行為主体に他ならない。つまり、文法学派の主張する言語認識では動詞を自動詞として見なすことによって結果と活動の基体が同一であっても構わない。ところが新論理学派の言語認識では米は結果の基体であるという構制の下に理解されているから、行為主体を表示する要素そして活動の限定者はどこにもないことになる。したがって、行為主体は第1格によってのみ知られることになるのである。

[Text 12] yadvā <sup>\*1</sup> vyāpārasāmānye <sup>\*2</sup> śaktasyākhyātasyārthaḥ <sup>\*33</sup>.  
vyutpattivaicitryāc cātra yaGādisamabhivyāhṛtākhyātārthavyāpāre  
prathamāntārthasya viśeṣaṇatayā <sup>\*4</sup> nvayaḥ. tatrākhyātasya <sup>\*5</sup> vyā-  
pāravācitvād <sup>\*6</sup> odanānvitatādrśavyāpārasya yaGādyasamabhivyā-  
hṛtākhyātā <sup>\*7</sup> pratipādyatvād <sup>\*8</sup> odanasya yaGādyasamabhivyāhṛtā-  
khyātapratipādyadhātvarthānvitavyāpāravattvarūpakartṛtvaṃ nirā-  
bādham eva <sup>\*8</sup>, “odanaḥ svaṃ pacati” ityādi <sup>\*9</sup> prayogasyāsādhuta-  
yābhāve 'pi tādrśavyāpāre tājanyapratipattiviśayatva <sup>\*10</sup> yogyatā <sup>\*11</sup>-  
napāyād iti.



1. A.ad. *lakṣaṇayā*. 2. A. *-sāmānya-*. 3. A. *-syāivārthaḥ*. 4. B. *-tvenā-*. 5. A. *tatra karttrākhyāṭasya*. 6. B. *-vācakatvād*. 7. B. *-ta-*. 8. A. om. 9. B. *-iti*. 10. B. *-tā-*. 11. A. *-tāyā*.

和訳：或いは、行為一般を表示するのは動詞人称語尾である。認識の多様性によって、第1格の意味は受動活用標識 *yaK* を伴う人称語尾の意味である活動に対して限定者として関係する。その場合、能動文での人称語尾は活動を表すから、また〔行為対象・〕米に連関している活動は受動標識 *yaK* を伴わない人称語尾によって表示されないから、受動標識 *yaK* を伴わない人称語尾によって表示される語根の意味に連関する活動を有するものであることという行為主体性〔の承認〕は米には阻害されることになる。文法上の不適格性によって「米は自らを料理する（\**odanaḥ svam pacati*）」という文章が成立しないとしても、その用法によって生まれた知識の内容としてのそうした活動に対する意味的適格性は消失しない。

解説：反射構文において動詞は受動活用標識 *yaK* を伴っておりながら意味的には行為主体を表すものとして扱われる。その場合、通常の能動文において米を行為主体とした文が可能になるように思われる。それは例えば「米はそれ自身を料理する（\**odanaḥ svam pacati*）」という文である。

今、活動が人称語尾によって表示されるとして考えると、ここで知られるのは活動とその基体との関係だけである。したがって、行為対象に行為主体性を付与した反射構文とは全く内容が異なるのである。更に、受動活用標識を伴わない限り、人称語尾は行為対象の側に連関している意味を表示しない。

反射構文は能動文では行為対象として表現されるものがその担う意味（結果）を自己の主體的な営みにおいて産出しているかの如く見なされる場合に成立する構文であるから、あくまで発話者の意識上の主体性付与が基になっている。そうした意識内の想定は文法的には通常の能動文では表現されないから、反射構文という特殊な構文形式を必要とするのである。行為対象が行為主体として見なされるとは言っても、それはあくまで行為対象の側にあるとされる動詞の意味が行為対象の主体性に連結しているというだけであって、行為対象が

行為主体になるのではない。pacati という動詞形では人称語尾は行為主体を表示するから、行為対象である米と同格関係には立たない。行為対象は人称語尾によって表示されていないから第2格が添加されるのであり、既表示項目に導入されるべき第1格ではないのである。仮に svam という形で第2格に終わる語を補足して行為対象を表そうとしても、それは意味上米と同格であるから、前述した自動詞・他動詞の区分を破壊してしまうことになる。そういう点からこの\*odanaḥ svam<sup>(31)</sup> pacati は文法的に不適格であり通常の文脈では用いられないものなのである。

しかしながら、ここに見られる人称語尾 -ti が活動に対しての適合性を有していること、つまり行為主体は活動の基体であるという意味上の適合性は消失しないから、人称語尾に表される活動の基体であるものを表示する語にそれと意味上同格であることを指示する第1格を用いることは正しい。文としては文法上破格であっても、人称語尾と第1格が導入される語との意味上の適格性は依然として崩されていないのである。<sup>(32)</sup>

[Text 13] “pācayati” ityādaṁ tu pākānukūlavvyāpāro ÑiJantārthaḥ, tadanukūlavvyāpāraś \*<sup>1</sup>cākhyātas tadāśraya eva \*<sup>1</sup> karteti.

“svatantraḥ kartā [P.1.4.54]” iti pāṇinisūtram apy etatparatayaiva vyākhyeyam iti.

tan na, acetane ’bhiyuktānām svarasataḥ kartṛpadāprayogāt.

1. A. -vyāpārākhyātasya, tadāśrayaḥ. B. cākhyātārthas tadāśraya eva.

和訳：しかし、「料理させる (pācayati)」という使役構文において、使役標識 ÑiC の意味は料理活動をもたらす活動であり、人称語尾はその〔活動〕をもたらす〔別の〕活動を意味する。そして、その〔後者の活動の〕基体が行為主体である。

同様に、パーニニ規則P.1.4.54「自立的なものが行為主体である」はそうしたやり方でのみ説明されなければならない。

もし、そう主張するならばそれは正しくない。何故ならば、対論者に

とて、kartrという語はそのままでは [=二次の意味表示 (lakṣa-  
nā) なしに] 無生物に対して用いることが出来ないことになってしま  
うからである。

解説: pācayati > √pac + NiC + ŚaP + tiP. P.3.1.26 [標識NiC導入]

文法学派による使役活動形に関する意味の表示関係は例えばバットージ・ディ  
ークシタによれば次のようなものである。

「因とは行為主体の教唆者である。その唆すという形の活動が hetu-  
matと呼ばれる。それが表示されるべき場合に動詞語根の後に挿入辞  
NiC が導入される。例えば『デーヴァダッタはヤジュニヤダッタを料  
理させる』。[この文の] 意味はヤジュニヤダッタに存在する [米の]  
軟化をもたらす活動をその内容とする、デーヴァダッタを基体とする唆  
しである」 (hetuḥ kartuḥ prayojakaḥ, tadvyāpāraḥ pravartanārūpo  
hetumān, tasmin vācye dhātor NiC syāt. pācayati devadatto yajña-  
dattena. yajñadatta-niṣṭhā-viklitty-anukūlavāpāra-viṣayinī pra-  
vartanā devadattāśrayety arthaḥ) [ŚK on P.3.1.26, II. 342, 7-10].

デーヴァダッタは他に何かをさせるという点で「教唆者」(prayojaka) であ  
り、文法的にはhetuと呼ばれる (P. 1. 4. 55: tatprayojako hetuś ca)。一方  
彼によって教唆されるものは「被教唆者」(prayojya) である。使役標識NiC  
は前者の活動を表示する時に導入される。

このText13 に示された言語認識は先に挙げたバットージ・ディークシタ  
のそれと比べれば、明らかに新論理学派のものであると判る。例えば「マイ  
トラはチャイトラに料理させる (pācayati maitreṇa caitraḥ)」という文にお  
いて、新論理学派が理解する言語認識は「料理活動 (=軟化) をもたらす、マイ  
トラに内在する活動に対する意欲、それをもたらす活動 [『お前が料理せよ』  
という言い回しで表現される] を有するチャイトラ<sup>(33)</sup>」である。つまりチャイト  
ラには或ることをもたらす活動があり、もたらされる或るものとはマイトラの  
活動である。このマイトラの活動は料理活動、即ち米の軟化という結果をもた  
らし、それはマイトラに内在している努力による。

さて新論理学派によれば動詞人称語尾によって努力が表示され、努力はその

基体を予想させるものであるから、行為主体とは「努力を有するもの (kṛti-mat)」と同置できる。この場合、努力とはアートマンの属性であるからアートマンのない無生物は行為主体にはなりえないことになる。例えば「車が動く (ratho gacchati)」では、語根√gam-は「前方との結合をもたらし活動」を表しているのだが、その活動は努力によってもたらされる。努力を持たない車はその活動を行えないのだから先の用例は正しくないことになる。しかし、その用例が適正であることは認められているから、ここに間接的意味表示機能を導入しなければならない。動詞人称語尾は努力に対して直接表示関係を有するから、努力以外のものを表示することはない。しかし、努力ではなく活動の基本性を有するものとしての車が意図される場合、人称語尾がこの基本性を表すものとして機能しなければならない。その機能が間接的表示である。こうした新論理学派の立場からは、能動文における人称語尾の表示対象を行為主体としその概念を自立的なものとする文法学派の立場は車が自己の意志によって動くものではないこと、即ち自立的ではないその点において間接的表示を受け入れなければならないことになる。文法学派は間接表示の機能を承認しないから人称語尾が行為主体を表すという文法学派の主張はその点において成立しないことになるわけである。

[Text 14] yat tu <sup>\*1</sup> “kāraḥkāntarāprajoyatve sati kāraḥkāntaraprayo-jakatvaṃ kartṛtvam” iti <sup>\*2</sup>. satyāntāc ca chedyaśaṃyogādirūpavyā-pārajanake kuṭhārāḍau nāṭivyāptir ity apare. tad apy <sup>\*3</sup>asat, i' svara <sup>\*4</sup>. prajoyānāṃ saṃsāriṇāṃ tattatkriyāśvakartṛtāpatteh.

1. A. om. yat tu. 2. A. om. iti. 3. A. om. apy. 4. A. īśvara.

和訳：或る者達によれば、行為主体性とは、「それ自身が他によって動かされない場合、他のものの促進者であること」である。そうした場合、例えば斧等が切られるものとの結合という活動を生ずる場合、先の定義は「[斧によって切る] (kuṭhāreṇa chinnati) という文における] 斧には過剰適用されない。

この見解も事実にも反する。[もしそうしたことが正しければ、] いかなる人間も自分の活動の行為主体とは成り得なくなるだろう。何故なら彼も主宰神によって動かされているからである。

解説：この定義は既に挙げた古典論理学派の理解を定式化したもののように思われる（本稿pp. 34-35及び註11）。ナーゲーシャ・バッタの *PLM* にはこの一節と平行になる文があり、同書の編者K・P・シュクラは自注 *Jyotsnā* においてこの定義を論理学派のものとしている。ほぼ同じ内容を述べた一節がマーダヴァの『サルヴァ・ダルシャナ・サングラハ』「ニヤーヤ学説」にも見出される。

「それ [=カーラカ] は全てある特殊な行為主体に集約された状態にある。行為主体性とは他のカーラカによって使役されないで、他の全てのカーラカを使役するものであることと定義される。認識・欲求・努力の基体であることである。」(tac ca sarvaṃ kartṛviśeṣopahitamaryādaṃ, kartṛtvam cetarakāraṇāprayojyatve sati sakalakāraṇaprayoktṛtvalakṣaṇaṃ jñānacikīrṣāprayatnādhāratvam.) [*SDS*, pp.253-4, ll.181-183].

この定義は行為主体の自立性という問題に係わる。他の一切のものによって何ら働きかけを受けない場合に他のものを動かすものであることが行為主体性だとすれば、例えば「チャイトラは斧で切る」という文では、斧はチャイトラによって操作されている限り、定義の条件「それ自身が他のものによって動かされない場合」を満たさないから、行為主体性を認められることはない。つまり、定義の過剰適用は生じないのである。

しかし、もしそうした定義を承認すると、先の用例で行為主体とされたチャイトラは、仮に主宰神の働きかけによって切断行為を行った場合には、彼には他のものによって動かされることがあることになり、チャイトラに対する行為主体性は認められなくなる。したがって、先の定義は正しくないとされるのである。

[Text 15] \*<sup>1</sup>aprayojyatvañ ca yadi phalānukūlatajjanyavyāpārānā-

śrayatvaṃ, tadā daṇḍādījanyasamyogādirūpavyāpārānāśrayatvāt<sup>\*2</sup>  
kulālādāv ativyāptiḥ<sup>\*3</sup>, anyac ca durvacam iti<sup>\*4</sup>.

1. A.ad. *tad*-. 2. A.B. *-vyāpārāśrayatvāt*. 3. A.B. *avyāptiḥ*. 4. A.om. *iti*.

和訳：もし、他に動かされないことというのが結果をもたらすそれによって生まれた活動の基体ではないことであるならば、陶工は棒等によって生まれた〔土との〕結合という活動の基体ではないから先の定義は〔陶工には〕適用されないこととなる。

解説：これは過小適用が論じられている。もし誰かによって動かされるということを除外するならば、主宰神によって動かされていても、或る人物の行為主体性は確保出来ることになる。しかし、それは同時に陶工が棒を使って壺を作る場合にも、棒に対する陶工の働きかけを除外することになり、陶工ではなく棒に行為主体性が認められることになる。したがって、主宰神→陶工→棒という働きかけの連鎖の中で主宰神に行為主体性を拒絶することは陶工に対しても同じ結果を生み、陶工に行為主体性を認めようとするれば主宰神にも行為主体性を認めざるを得ないことになる。

さて以下がバヴァーナンダの行為主体性定義である。

[Text 16] <sup>\*1</sup>atrāhuḥ — “anukūlakṛtimattvaṃ kartṛtvam,” pākānukūlavīpāravattvapraśisandhāne ’pi kāṣṭhādau tāntrikāṇām svarasataḥ kartṛpadāprayogāt, kṛtākṛtavibhāgādīnā kṛdhātor yatnārthakatve ni’scite āśrayārthakatṛjantakṛdhātuvyutpannakartṛpadasya<sup>\*2</sup> yatnāśrayārthabodhakatvāc ca, acetane kartṛpadaprayogo gaunaḥ.

1. A. *tatrāhuḥ*. 2. A. *-śabdasya*.

和訳：さて〔ニヤーヤ派の見解が〕述べられる。行為主体性とは〔行為を〕もたらす努力を有するものであることである。〔したがって〕料理行為に参与する活動を有することが〔人称語尾から〕想起されたとしても、分析主義者達には *kartr* という語を「薪」等に用いることは実質的には不可能である。更に、一旦動詞語根√*kr*・が既に為された或いは未だ為

されていないという区別によって「努力」を意味するものとして確定したならば、その語根に基体を表す  $-trC$  接尾辞を添加して派生した  $kartr$  という語はその努力の基体を表すものとなる。従って、無生物に対するこの語の使用は二次的な用法である。

解説：行為主体がいかに関努力の基体であるのか、そして何故それが人称語尾によって表示されるのかについては既に略述した。新論理学派の見解では、動詞形は  $\sqrt{kr}$  を使ってパラフレイズされるから、動詞  $\sqrt{kr}$  の意味、即ち「努力」が動詞人称語尾によって表示されるのである。これはまた行為主体という語の語源解釈にもあてはまる。 $kartr$  と言う語は動詞  $\sqrt{kr}$  に基体を表す  $-trC$  接尾辞<sup>(36)</sup>を添加してつくられているから、その意味は動詞の意味の基体、つまり「努力の基体」にほかならない。

テキスト中に言われる「為された・未だ為されていない云々」というのはウダヤナに基づいている。

「為された・未だ為されていないという区別によって行為主体というものが確定されるから、意欲こそが努力であり、それが先行した後で能成力 (bhāvanā) となる」(kṛtākṛtavibhāgena kartṛrūpavyavasthayā / yatna eva kṛtiḥ pūrvā parasmin saiva bhāvanā //) [Nyāyakusumāñjari 5. 9].

[Text 17] yadi cānyaviṣayakakṛtijanye nāntariyake “matto bhūtaṃ na tu mayā kṛtaṃ” iti vyapadeśān na mukhya<sup>\*1</sup> kartṛtvam, tadā<sup>\*2</sup> tattadviṣayakatvenāpi kṛtir viśeṣaṇīyā. na caivam<sup>\*3</sup> tadviṣayakakṛtimattvam eva tattatkriyākartṛtvam<sup>\*4</sup> astu, gurutarabhārottolanādaḥ tadviṣayakakṛtimattve ’py uttolana-kriyādyaṇiṣpattau kartṛpadāprayogāt.

1. B. mukhyam. 2. A.B. tad-. 3. B. tattad-. 4. A. tatkartṛtvam.

和訳：もし、「[それが] 私に生じた、しかし私がなしたのではない (matto bhūtaṃ na tu mayā kṛtaṃ)」という文において別の内容を有する努力

から生じたものが言われる場合、そこ [=私] には実際には行為主体性はない。その場合、努力はそうした内容を有する特性によって限定されたものでなければならない。しかし、そうした行為主体性がその内容をもつ努力を有するものであることと言う必要はない。何故なら、重いものを持ち上げるという行為においてその[行為の] 内容がそうした[持ち上げること] であるような努力を有することであるとしても、kartr という語は持ち上げる行為を達成することの出来ない[人物には] 用いられないからである。

解説：もし、人称語尾によって努力が表示されるとすれば、これは次のような反論を招く。新論理学派によれば、努力は「認識 (jñāna) → 欲求 (icchā) → 努力 (kṛti)」の順序によってのみ生起するものとされている。努力は何かを認識し、それに対する欲求が生じてからのみ生まれる。それは常に「何かを得ようとする努力」であるから「Xを得ようという努力」が動詞人称語尾によって示される。この時、Xを指向していながらYを得てしまったとしよう。動詞人称語尾は「Xを得ようとする努力」だけを表示し、その努力の基体が行為主体として指定されるのだから、「Yを得た努力」の基体は「Xを得ようとする努力」とその基体を表現した文では行為主体性を認められるわけにはいかない。例えば、「チャイトラは米を料理する」という文からは米を料理しようとする努力の基体としてチャイトラに行為主体性が認められる。ところが彼が米を料理しようとして豆を料理してしまった場合、既に認められていた行為主体性は米を指向する努力に基づいている以上、豆を料理した努力の基体には認められないことになる。つまり「チャイトラは米を料理する」という文は誤文となるのである。努力が常に何かを指向するものである以上、その指向されるものが個別例においてそれぞれ特定されていなければ努力の基体に行為主体性が認められないことになり、しかし努力の指向される内容を個別に特定することは無限大の規定を必要とする。ここではそうした新論理学派の言語認識への批判論点が前提されているのである。

バヴァーナンドはそうした個別の指向対象を定義する必要を感じていない。行為主体性とはそれが行為主体となりうるものだけに認められるものである。



努力は行為主体の属性であるから、努力の指向対象が何であれ努力を有するその点に行為主体性が認められるのである。重いものを持ち上げる能力のないものにはその努力が欠如しているものとしてその者に行為主体性を認める文は作られないのである。

[Text 18] viṣayatvañ ca<sup>\*1</sup> sādhyatvena bodhyam. tena bhojanakṛter  
uddeśyatvena sukhādiviṣayakatve<sup>\*2</sup> 'pi tatkartur na sukhakarṣ-  
tvam. asmadādikarṣkapākādāv<sup>\*3</sup> apīśvarasya karṣṭvām iṣṭam eva,  
na caivam “īśvaraḥ pacati” iti prayogaḥ<sup>\*4</sup> syāt, tathāvivakṣāyām  
iṣṭatvāt<sup>(38)</sup>

1. A.om. ca. 2. B. -yatve. 3. B.om. api. 4. B.om.

和訳：[行為の] 内容であること (viṣayatva) とは [何か] 達成されるべきこと (sādhyatva) として理解すべきである。したがって、たとえ食べようという努力が目的として快楽をその内容としていたとしても、[食べる行為の] 行為者は快楽の主体であるとは言えないのである。[もしそれらが同じであるならば] 「私」が行為主体である食べる行為において、主宰神に行為主体性が認められるはずである。しかし「チャイトラが料理する」という文の代わりに「\*主宰神が料理する」とは表現しない。何故なら、もしそう表現したいならば、そのように表現するからであって [別の文の代わりに用いるのではないからである]。

解説：この部分は行為主体性を認定するレベルをどこに設定するかの問題を扱っている。先に見たように、行為主体の自立性を他によって動かされないこととした場合に主宰神の関与を排除しなければ定義の不当な適用を生んでしまう。それと同時に、ある特定のものを指向する努力も他からの働きかけを排除しなければならなくなる。例えば、「チャイトラが食べる」(caitro bhuñkti) ことは「チャイトラが食事を行う」(caitro bhojanam karoti) とパラフレイズされ、チャイトラが食事という活動をもたらす努力を有するものとして行為主体であると措定される。この時、チャイトラを行為主体とする「食事」がチャイ

トラに内在する努力によって達成されるべきもの (sādhyaṭva) として理解されている。したがって、結果的にその食事によって「快樂」が得られたとしても努力の内容、即ち達成されるべきものは「食事」だけであるのだから、「食事」の行為主体であるものは「快樂」の行為主体とは見なされない。動詞人称語尾によって表示される努力とその基体は、この限りにおいて「食事」行為にのみ連関性を有し、同じ基体が快樂の基体として理解されるのはあくまで間接的なのである。

ところが、努力の内容であることを達成されるべきこととして理解すると、次のような事例では定義の過剰適用を生んでしまう。例えば、主宰神が自らに内在する努力によって達成されるべきものとしてチャイトラの料理行為を指向していると考えられる場合である。主宰神は常に何かを生み出す努力の基体であるから我々の行う行為をその内容として指向する。この場合、「チャイトラが料理を行う」(caitraḥ pākam karoti) は「主宰神が料理を行う」(\*Īśvaraḥ pākam karoti) という理解がされることになる。したがって、もし我々の側が料理行為をもたらす努力の基体であることを意図するならば、この後者の理解は明らかな誤読なのである。仮に主宰神の関与があるとしても、料理活動をもたらす努力は我々を基体とするのだから、あくまで我々が行為主体でなければならない。つまり動詞人称語尾によって直接に表示される努力の基体は我々なのである。もし、主宰神の活動が意図される場合は、主宰神に行為主体性を認めた文が作られるのである。

[Text 19] kāryatvānavacchinnaṁjanyatānirūpitam asādhāraṇam anukūlatvam eva vā\*<sup>1</sup> lakṣaṇaghaṭakam ity āhuh.

1. B. om.

和訳：或る者達はまた次のように主張する。結果性に制限されていない被生産性によって限定される他と共通しない参与性が先の定義に含意されている。

解説：前節で努力の基体性をどのレベルで認定するかの問題が扱われたが、こ

ここでは Text16 に提示された新論理学派の行為主体性定義に現れる「もたらす」(anukūla) の概念規定が補足的になされる。「能助性」(anukūlatva) とは実際には「行為を生むこと」を指しているから、「能産者性」(janakatva) と同置される。ここで規定される概念の骨格を取り出せば、「所産者性に限定された能助性(能産者性)」(janyatānirūpita-anukūlatva [= janakatva]) であり、今問題とされる関係が「生産関係」(janyajanaka-bhāva) であることが意図されているわけである。例えば壺と陶工の間には壺の側に janyatā が、陶工の側に janakatva が存在して、両者を関係の構成項として能産関係が成立している。この両者の関係は、陶工が布を織らないように、原因と結果が特定されている。その限定が定義中に示される「他と共通しない」(asādhāraṇam) である。

さて、前節で見たように、この定義においても主宰神の関与を排除しなければならぬ。主宰神に内在する努力がもたらす結果性が今問題とする壺の側にあり、それが壺の所産性を制限しているとすれば、陶工は行為主体とはみなされない。壺を基体とする所産性に限定される能産者性が主宰神を基体としていないことを示そうとした部分が「結果性に制限されていない」

(kāryatvānavacchinna-) である。ニヤーヤ学派ではこの「結果性」(kāryatva) は一般に主宰神の存在証明の根拠として理解されている。(例えば NS 4. 1. 19-21 とそれらに対する注釈書を見よ。) また新理論学派も同様の見解をとっており、当該定義<sup>(39)</sup>に用いられた「結果性に制限されていない」という限定によって主宰神に行為主体性を付与する可能性が排除されるのである。

## Bibliography and Abbreviations

### Sanskrit Texts

*Ākhyātaśaktivāda* of Raghunātha Siromaṇi.

in *TC*. vol. 4, part 2.

*KC*: *Kāraṇacakra*.

(1) by Mahadeva Gangadhara Bakre, in *Vādārthasaṃgraha*, part 2, 1914, pp.1-23: Abbr. B.

(2) by Sudhāṃśusekhara Bhaṭṭācārya, Calcutta, 1923 : Abbr. A.

(3) by Brahma Saṅkara Sāstrī, Haridāsa Saṃskṛta Granthamālā No.154, Benares, 1942.

Manuscripts of *KC*. [All preserved in Bhandarkar Oriental Research Institute, Pune]

138 of A1883-84,	fols.29,	lines 9 ,	DN.,	Paper
158 of 1899-1915,	fols.13,	lines 12,	DN.,	Paper
254 of 1895-98,	fols.17,	lines 8 ,	DN.,	Paper
311 of 1895-1902,	fols.17,	lines 10,	DN.,	Paper
637 of 1882-83,	fols.12,	lines 14,	DN.,	Paper
736 of 1887-91,	fols.11,	lines 12,	DN.,	Paper
751 of 1884-87,	fols.14,	lines 13,	DN.,	Paper
790 of 1887-91,	fols.18,	lines 12,	DN.,	Paper

*MBh*: Patañjali's *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya*.

(1) Ed. by F.Kielhorn, rev.by K.V.Abhyankar, 3 vols. Poona: BORI, 1962, 1965, 1972. [Text is referred by volume, page, and line]

(2) — with *Pradīpa* and *Uddyota*.

Eds. by Bhārgavaśāstrī Bhikāji Joshi et al. 6 vols. Vrajajīvan Prācyabhārati Granthamālā No.23, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1988. (Rep. NSP. edition)

*Nāñvāda* of Raghunātha Śiromaṇi.

in *TC*. vol. 4, part 2.

*Nyāyakusumāñjarī* of Udayana.

with commentaries *Bodhanī*, *Prakāśa*, *Prakāśikā* and *Makaranda*.

Eds. by Padmaprasāda Upādhyāya and Dhunḍirāja Śāstrī, Kashi Sanskrit Series 30, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1957.

*Nyāyasiddhāntadīpa* of Śaśadhara.

with *Ṭippana* by Guṇaratnasūri.

Ed. by Bimal Krishna Matilal, L. D. Series No.56, Ahmedabad: L. D. Institute of Indology, 1976.

*Nyāyasiddhāntamuktāvalī* of Viśvanātha Pañcānana.

with *Kiraṇāvalī* of Kṛṣṇavallabhācārya.

Eds. by Nārāyaṇacarāṇa Śāstrī and Śvetavaikuntha, Kashi Sanskrit Series No.212, Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Samsthan, 1951 (4th ed. 1990).

*NS: Nyāyasūtra* of Gautama.

with Vātsyāyana's *Bhāṣya*, Uddyotakara's *Vārttika*, Vācaspati Miśra's *Tātparyaṭīkā* and Viśvanātha's *Vṛtti*.

Eds. by Taranatha Nyāyatarkatīrtha and Amarendramohan Tarkatīrtha, 2 vols., Calcutta Sanskrit Series Nos.18 and 29, Calcutta: Metropolitan Printing & Publishing House, 1936-44 (Rep.Kyoto: Rinsen Book, 1982).

*PLM: Paramalaghumañjūsā* of Nāgeśa Bhaṭṭa.

(1)with the commentary *Jyotsnā*.

Ed. by Kālīka Prasād Shukla, M.S.University of Baroda Research Series No. 7, Baroda: M.S.University of Baroda, 1961.

(2)Ed. by Kapiladeva Śāstrī, Kurukṣetra Viśvavidyalaya Prakāśana, 1975.

*TC: Tattvacintāmaṇi* of Gaṅgeśa.

with commentaries: *Rahasya* and *Āloka* respectively by Mathūranātha Tarkavāgīśa and Jayadeva Miśra.

Ed. by K.N. Tarkavāgīśa, 4 vols ( 6 parts), Bibliotheca Indica No.98, Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1884-1901. (Rep. Vrajajīvan Prācyabhārati Granthamāla No.47, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, 1990).

*SDS: Sarvadarśanasamgraha* of Sāyaṇa Mādhava.

Ed. by V.S.Abhyankar, Government Oriental Series Class A No.1,  
Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, [Third edition by T.G.  
Mainkar, 1978].

ŚK: *Śabdakaustubha* of Bhaṭṭoji Dikṣita.

Ed. by Gopāla Shastri Nene. 3 vols. Chaukhamba Sanskrit Series No.  
2, Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Office, rep. 1991.

VBh: *Vaiyākaraṇabhūṣaṇa* of Kaunḍa Bhaṭṭa.

Ed. by Pt.Manudeva Bhaṭṭācārya. Harijivandas Pracyavidya Grantha-  
mala No. 2, Varanasi: Chaukhamba Amarabharati Prakashan, 1985.

VBhS: *Vaiyākaraṇabhūṣaṇasāra* of Kaunḍa Bhaṭṭa.

with *Darpaṇa* commentary by Śrī Harivallabha.

Ed. by Chandrika Prasad Dwivedi. Vrajajivan Prachyabharati Gran-  
thamala No.42, Delhi: Chaukhamba Sanskrit Pratisthan, 1989.

VMM: *Vaiyākaraṇamatonmajjana* of Bhaṭṭoji Dikṣita.

see VBS. and VB.

VP: *Vākyapadīya* of Bhartṛhari.

(a) Ed. by Wilhelm Rau. Abhandlung für die Kunde des Morgenlan-  
des Bd.42. 4. Wiesbaden, 1977.

(b) — *Kaṇḍa* III. part i, with *Prakīrṇaka-Prakāśa* of Helārāja. Ed.  
by K.A.Subrahmania Iyer. Deccan College Monograph Series No.21,  
Poona: Deccan College, 1963.

— *Kaṇḍa* III. part ii. Ed. by K.A.Subrahmania Iyer, Poona: Deccan  
College, 1973.

VSLM: *Vaiyākaraṇasiddhāntalaghumañjūṣā* of Nāgeśa Bhaṭṭa.

Eds. by Pt.Madhava Shastri Bhandari, Pt.Narahari Shastri Pendey, et  
al. 2 vols. Chowkhamba Sanskrit Series No.44. Varanasi: Chow-  
khamba Sanskrit Office, 2nd ed., 1989.

VSM: *Vaiyākaraṇasiddhāntamañjūṣā* of Nāgeśa Bhaṭṭa.

Ed. by Kapila Deva Shastri. Kurukshetra: Vishal Publication, 1985.

Secondary Sources (non-Japanese)

Bhate, Saroja

- 1982 “A Note on *Karmakartari*,” *CASS Studies* No. 6, Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, class E No. 8, Poona: University of Poona, pp. 173-176.

Bhattacharya, D. C.

- 1958 *History of Navya-Nyāya in Mithilā*, Darbhanga: Mithilā Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.

Bhattacharya, Gopikamohan

- 1978 *Navya-Nyāya—Some Logical Problems in Historical Perspective*, Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan.

Das, Achyutananda

- 1987 *Bhavānandīyam Kāraṇakakram: Ekam Adhyāyam*. (Bhavānanda's *Kāraṇakakra: A Study. With the Critical Edition of the TEXT up to the end of Karaṇavivecanam*), Ph.D. Thesis submitted to University of Poona (unpublished), [in Sanskrit].
- 1992 “*Karaka-theory for Knowledges*,” in *Samḥāṣā*, Vol.13, pp.43-63.

Deshpande, Madhav.M.

- 1985 *Ellipsis and Syntactic Overlapping: Current Issues in Pāṇinian Syntactic Theory*, Post-graduate Research Department Series No.24, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

Filliozat, Pierre

- 1983 “The Pāṇinian Conception of *Karmakartṛ*,” in *Proceedings of the International Seminar in the Aṣṭādhyāyī of Pāṇini*, Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, class E No. 9, Poona: University of Poona, pp.11-16.

Joshi, S.D.

- 1982 “The Reflexive Constructions in Pāṇini,” *CASS Studies* No. 6, Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, class E

No. 8, Poona: University of Poona, pp. 199-214.

Kaviraj, Gopinath

- 1982 *The History and Bibliography of Nyāya-Vaiśeṣika Literature*, (Rep. The Princess Wales Sarasvati Bhavana Studies, Varanasi: Sampūrṇānanda Saṃskṛta Viśvavidyālaya).

Kudo, Noriyuki

- 1994 “Why is ‘\*jñāyate ghaṭaḥ svayam eva’ not Accepted?—Karmakartari Constructions Discussed by Navyavaiyākaraṇas,” in *Vācas-patyam: Pt. Vamanshastrī Bhagavat Felicitation Volume*, eds. by Madhav M. Deshpande and Saroja Bhate, Pune: Vaidika Saṃśodhana Maṇḍala, pp.107-121.

Kumar, Aravinda

- 1992 *Bhavānanda-Kṛta Kāraṇacakra—Eka Adhyāyana* [ *Vyākaraṇaśāstra evaṃ Navyanyāya ke Ālika meṃ*] (*Bhavānanda's Kāraṇacakra—A Study [In the Light of Sanskrit Grammar and The Philosophy of Navya-Nyāya]*), Kurukshetra: Nirmal Book Agency. [in Hindi]

Mishra, Umesh

- 1966 *History of Indian Philosophy*, vol.II, Allahabad: Tira bhukti Publications.

Matilal, B.K.

- 1977 *Nyāya-Vaiśeṣika, A History of Indian Literature*, volume 2, fasc. 2, ed. by Jan Gonda, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 1985 “The Doctrine of *kaṛaṇa*,” in *Logic, Languages and Reality—Indian Philosophy and Contemporary Issues*. Delhi: Motilal Banarsidass, pp.372-378.
- 1990 a “Bhavānanda on ‘What is *Kāraṇa*?,” in *Pāṇinian Studies: Dr. S.D. Joshi Felicitation Volume*, eds. by Madhav M. Deshpande and Saroja Bhate, Center for South and Southeast Asian Studies Number 37, University of Michigan, pp.263-288.



- 1990 b “The *Kāraka* Theory,” in *The Word and the World – India’s Contribution to the Study of Language*, Delhi: Oxford University Press, 1990, pp.40-48.
- Rao, Veluri Subha.
- 1969 *The Philosophy of a Sentence and its Parts*, New Delhi: Munshram Manoharlal.
- Vattanky, John.
- 1984 *Gaṅgeśa’s Philosophy of God*, The Adyer Library Series No.115, Madras: The Adyar Library and Research Centre.
- Wada, Toshihiro
- 1990 *Invariable Concomitance in Navya-Nyāya*. Sri Dass Oriental Series 101, Delhi: Sri Satguru Publications.

#### 和文論文

岩崎 良行

- 1994 「パーニニ文法学派における〈態〉記述の一考察－自動・再帰用法 (karmakartari) について－」『印度哲学仏教学研究』第八号、pp.40-62。

小川 英世

- 1990 「行為と言語－サンスクリット意味論研究：動詞語根の意味」『広島大学文学部紀要』第四九巻、特輯号三。

黒田 泰司

- 1979 「Kumārila の bhāvanā 説について (1)」『印度学仏教学研究』28-1, pp.456-458.
- 1980 「Kumārila の bhāvanā 説について (2)」『印度学仏教学研究』29-1, pp.436-441.

丸井 浩

- 1991 「新ニヤーヤ派が言及する bhāvanā 説」『印度学仏教学研究』39-2, pp.950-954.

和田 壽弘

- 1989 「インド新論理学派における制限者 (avacchedaka) (2)」『名古屋大学文学部研究論集』105: pp.25-35.
- 1990 「インド哲学における言語分析 (1)」『名古屋大学文学部研究論集』108: pp.73-92.
- 1993 a 「インド哲学における言語分析 (2) —*Nyāyasiddhāntamuktāvalī* 「言語論の章」和訳研究」『インド学密教学研究』宮坂有勝博士古稀記念論集、法蔵館、pp.265-283.
- 1993 b 「インド哲学における言語分析 (3) —*Nyāyasiddhāntamuktāvalī* 「言語論の章」和訳研究」『名古屋大学文学部研究論集』117: pp.17-33.
- 1995 「インド哲学における言語分析 (4) —*Nyāyasiddhāntamuktāvalī* 「言語論の章」和訳研究」『南都仏教』71: pp.1-12.
- 1996 「インド新論理学派における直接表示機能の把握手段と作用対象—インド哲学における言語分析 (5)」『東海仏教』41: pp. (1)-(13).

註

- (1) 新論理学派の言語論の概略については和田壽弘による一連の論考、即ち『ニヤーヤ・シッダーンタ・ムクターヴァリー』の和訳研究を見られたい。
- (2) *VBh. on VMM.*, k.2 [p.18]: *tīhārthāḥ karṭṛkarmasaṅkhyākālāḥ, tā-trāpi karṭṛkarmany vyāpārāphalayoh viśeṣaṇe, saṅkhyā tu anayoh, kālas tu vyāpāre eva.*
- (3) 小川 [1990], pp.106 - 107参照。
- (4) *TC, śabdakhaṇḍa (dhātuvāda)*, vol. 4 part 2, p.849: *phalānukūlavāpāra eva dhātvarthaḥ.* 結果と活動との間には「能助性関係」(*anukūlatvasambandha*) が存在し、活動は結果によって限定される。これについて *TC* の注釈書は次のようにも記述している。Jayadeva 'Pakṣadhara' Miśra on *ibid. phalēnāvaccinna eva vyāpāro dhātvarthaḥ.* Raghunātha Siromaṇi [*Ākhyātaśaktivāda*, in *TC*. vol. 4, part 2, p.996]: *phalaviśeṣāvaccinnavyāpārasyaiva dhātvarthatvāt.*
- (5) 和田 [1990, pp.10 - 12] に動詞人称語尾は努力を表示するという彼らの理解がどのような関係性の下に成り立っているのかが論述されている。

- (6) この言語認識はガンゲーシャによる。TC, ākhyātavāda, vol. 4 part 2, pp. 837-8: caitras taṇḍulaṃ pacatity atra taṇḍulasya karmatvenānvayāt taṇḍulavṛttiphalajanakavyāpārajanakayatnāśrayaś caitra iti pratīyate iti sa eva viśeṣyaḥ. caitreṇa pacyate taṇḍula ity atra caitravṛttiyatnajanyavyāpārajanayaphalāśrayas taṇḍulah pratīyate iti yatnasya paramparayā taṇḍula eva viśeṣyaḥ.
- (7) 小川 [1990, p.33] は〈行為参与者〉と呼ぶ。
- (8) 分離の基点として apādāna [P.1.4.24 - 31], 受容者として sampradāna [P.1.4.32 - 41], 行為手段として karaṇa [P.1.4.42 - 44], 行為の基盤として adhi-karaṇa [P.1.4.45 - 48], 行為対象として karman [P.1.4.49 - 53], そして行為主体としての kartr [P.1.4.54 - 55] である。
- (9) パーニニ派のカーラカ観については小川 [1990, pp.40 - 46] を参照されたい。
- (10) *Nyāyavārttika* on NS 2.1.16 [p.434] : kiṃ punar vrkṣasya svasthitau svātantryam? kārakāntarānapekṣatvam. 更に同様の言明が NS 4.1.21 に対する箇所にも見出される。“yady ākhyātaśabdavācyam adhikṛtyocyate, tadā'siddho hetuḥ svātantryābhyupagamāt - svātantryam hi bhagavati nityam asti. kiṃ punaḥ svātantryam? anyakārakāprayojyatvam ita-rakārakaprayokṛtvaṃ ca [p.948].
- (11) *Nyāyavārttikatātparyatikā* on do., [ibid.] : kiṃ punaḥ svātantryam iti. ita-rakārakāprayojyatvaṃ prayojakatvaṃ ca kārakāntarāṇām kartuḥ svātantryam uktam. 面白いことにこの論理学派と同様の見解を主宰神を論ずる箇所でシャイヴァ派も呈示している。“svatantrasyāprayojyatvaṃ karaṇā-diprayokṛtā. kartuḥ svātantryam etad dhi na karmādyanapekṣatā” [*Sarvadarśanasamgraha*, Saivadarśana, p.277, ll. 39-40]. Cf. Kumar [1992] p.46.
- (12) *Nyāyavārttika* は行為主体の優位性を「kriyāという語によって動詞の意味が表示される、そのことについての主要な能作者が行為主体である。この行為主体が動作と結びつく場合はそれは能力を発揮する」(kriyety anena śabdena dhā-tvartho 'bhidhiyate tasya yat pradhānasāadhanam sa kartā. so 'yaṃ kartā yadā kriyayā sambadhyate tadā śaktim vyanakti) として明確に述べている。[on do., p.440]
- (13) 以下に提示する年代は G.Bhattacharya [1978, pp.3-11] に拠っている。
- (14) 未出版の博士論文であるが、このテキストを取り扱ったものがある。  
A. R. Mishra, *Navya-Nyāya Concept of Cause and Effect—Relationship with special Reference to Bhavānanda's Kāraṇatāvicāra*, 1988. (univ. of Poona)
- (15) この奥書は MS.No.790 of 1887 - 91 より表記を正規のサンスクリットに直したものである。8本の写本のうち末尾のない1本を除くと全てが“śab-dārthasāramañjaryām”とある。

- (16) *New Catalogus Catalogorum*, vol. 3 (pp.372-373) を見よ。
- (17) このテキストはKC (1)所収の *Vādarthasamgraha*, vol. 3 にある。
- (18) Das [1987] は第4節の「行為手段性 (karaṇatva)」までの校訂テキストを提示しているが、出版本間或いは写本間のヴァリエーションの取り方に混乱が見られ、従って本稿ではそれを参照していない。
- (19) 基本性議論においていかに性質保持者性 (dharmavattva) がその性質を持つ基体性 (āśrayatva) に同置されるかについては小川 [1990, pp.35-46] を参照されたい。
- (20) 小川 [1990], pp.32-34.
- (21) 厳密には挿入辞 yaK は受動活用だけではなく、いわゆる非人称構文 (bhāve) の場合にも挿入される。
- (22) ここに挙げた「知る」という動詞の意味はナーゲーシャのものである。カーウング・パッタは結果を「無知の除去」とし、対象性の関係で対象の側にも存在するとする。この点においてこの動詞の他動詞性は確保されるが、動詞語根の別種の分類では異なった類に分類されることになる。詳しくは Kudo [1994] を見られたい。
- (23) 動詞「消滅する」の意味と基体の同定については小川 [1990, pp.107-108] を見よ。
- (24) Cf. *Śabdakaustubha* on P.3.1.67, II,384,7-8 (b) : tatrāpi SaBādayo dhātv-arthe vyāpāre āśrayasya viśeṣaṇatām dyotayanti, yaKCīNau tu phale.「そのうち ŚaP 等は動詞語根の意味である活動に関してその基体の限定者であることを表示する。しかし yaK, CīN は結果に関して [その基体の限定者であることを表示する]。」
- (25) 以上の派生過程に用いられる規則は以下の通り。P.3.1.67: sārva dhātuke yaK; P.3.4.69: laḥ karmanī ca bhāve cākarmakebhyah; P.3.2.123: var-tamāne IAT; P.3.4.78: tiP-tas-jhi-siP-thas-tha-miB-vas-mas-ta-ātām-jha-thās-āthām-dhvam-iḍ-vahi-mahiN; P.1.3.13: bhāvakarmaṇoḥ (ātmanepadam # 12) ; P.1.4.100: taNānāv ātmanepadam; P.3.4.79 : TITa ātmanepadānā m TEr e.
- (26) kartā という語はP.3.1.67: kartari SaP より得られるが、その際第7格は第1格に転換される。
- (27) *Mādhavi* on KC, p.11: svam - odanaḥ, tadvyrttivyāpāraḥ - taṇḍulāvayavā-gniśaṃyogaḥ, etasyaudanavyrttitvañ ca svāśrayārabhyatvasambandhena, pākāḥ - viklittm[misprint/ Read -tty-]anukūlavāyāpāraḥ sa ca taṇḍulāvayavakriyā viklittiś ca śīthilākhyataṇḍulāvayavasaṃyogaḥ.
- (28) Joshi [1982] ではカーティヤーヤナの *Vārttikas* IX-X on P.3.1.87 [II, 68, 14-25] に基づいて反射構文における再帰代名詞の付加的使用とその脱落を反射

構文成立の必然的要件として論じている。しかしこの見解は Deshpande [1985, pp.9-16] に批判されている。また岩崎 [1993] ではカイヤタによる“svayam eva”使用に対する見解が示されている (pp.56-57)。

- (29) 小川 [1990], p.45。
- (30) 実質的にはこの料理活動とは動詞語根の意味の結果に相当する。
- (31) 岩崎 [1993], p.43参照のこと。
- (32) ここで見られる「人称語尾は活動を表示する」という理解はミーマーンサー学派、特にパーツタ派のものである。彼らの言語認識では活動が主要素として構制されるが、文法学派とは異なり彼らはその意味が動詞人称語尾によって表示されるものとする。彼らの言語認識については概略として Rao [1969, pp.24-34] を参照されたい。動詞語尾の表示関係に関する新論理学派とミーマーンサー学派との議論は和田 [1993, pp.20-22] にあり、またミーマーンサー学派の主張する能成作用 (bhāvanā) は例えば黒田 [1979, 1980]、丸井 [1991] に論じられている。本稿では新論理学派と文法学派の対論ということを主に概観することを意図しているので、ミーマーンサー学派との論争については別稿を期したいと考えている。
- (33) *Mādhavi*, p.12 : pākānukūlamaitranisṭhavyāpāras tadyaceṣṭā tatkr̥tir vā tadanukūlo yo vyāpārah “tvam paca” ityādisābdaprayogarūpo tadvān caitra(h) .
- (34) *PLM*, p.170: yat tu kārakāntarāprayojyatve sati kārakacakraprayojakatvaṃ kartṛtvam iti. tan na. sthālī pacati, asis chinnattityādaṃ sthālyādeḥ kārakacakrāprayojakatvāt kārakāntaraprayojyatvāc ca tattvaṃ na syād ity alam.
- (35) *Jyotsnā*, ibid. : tārīkīkābhīmatam kartṛtvam dūṣayati. ところが *PLM* (2) の注釈によれば、*VBhS* の註釈 *Śaṅkari* がこの定義をミーマーンサー学派のものとしていると言う。本稿筆者は残念ながら *Śaṅkari* を参照出来ないでいる。
- (36) P.3, 1.133 : NvuL-trCau; P3, 4.67: kartari kr̥t.
- (37) 和田 [1993], p.24及び注79参照のこと。
- (38) *KC* のどのエディションにも見いだされないが、写本には次のような一節が確定見解として残されている。内容的には前段までの要約にあたり、写本筆写者のメモ書きのようなものであったと思われる。vastuto 'vacchedakatāsaṃsargeṇaivākhyātārthakṛteṣ ca caitrādāv anvayasya vyutpannatvāt. tena ca saṃsargeṇa kr̥ter īśvare bādhān na tathābhīlāpah. prakṛte 'pi tatsaṃsargeṇaiva kr̥timattvasya praveṣe tu na tathātiprasaṅgo 'pi iti dheyam. 「実際には、人称語尾の意味である努力はチャイトラに対して限定者性の関係を通して関係すると理解される。従って、努力はこの連関を通して主宰神に対する障害とならないから、そのような文は生まれないのである。それ故、努力を有する

ことがその連関によって知られる場合には、基本的に誤りを引き起こさないものである。以上のように理解すべきである。」[MS. No.751, 2R6-8]

- (39) 主宰神の存在論証に関する論理学派の論議についてはVattanky [1984] を参照せよ。特に新論理学派について彼は次のように述べている。“Both Gaṅgeśa and Śaśadhara take, though not always in words, but actually in fact, *kāryatva*, being-an-effect, as the reason in the syllogism proving the existence of God.” (p.126)